

声の文化と文字の文化

山口 建治

書名にひかれて『声の文化と文字の文化』（藤原書店刊）という本を最近読んだ。ウォルター・J・オングという古典学者の著書の翻訳である。音声としてのことばしかなく書くことを知らない社会の文化（声の文化）と、ことばを書きあらわすことになっている社会の文化（文字の文化）との相違を探究し、前者から後者への移行が人間の思考や表現にどのような変化をもたらしただかを論じたものである。今ではもはや文字無しで思考することすらできなくなっている我々が、声の文化の遺産を偏見無しに見るにはどうすればよいか、どのようにあつかうべきか種々のヒントを与えてくれる有益な書である。

中国の文字（漢字）使用は、殷の甲骨文が始まるが、印刷技術の発達にともない営利的出版が盛んになるのは北宋時代（10世紀～12世紀）からだといわれる。これより本格的な文字文化の社会が出現したといつてよいであろう。爾来、声の文化と文字の文化の二極分化が進み、漢字を習得して知識を独占する知識層の文化と目に一丁字無き庶民層の文化が対立し、相互に影響を与えながら、中国文化を形成してきた。筆者流の用語に言いかえると、中国文化における雅俗の対立と相互影響である。ただ、この過程をただしく認識することは容易ではない。

第一、我々のように外国にいて、もっぱら書物を通して中国の文化を見てきた者にとっては、声の文化はほとんど視野、否、耳に入ってこなかった。我々の中国研究はつい最近まで、視覚だけが頼りの文字文化が対象であった。

第二に、中国内部でも、文字の文化が圧倒的に優位を占め、声の文化を正当に評価する者がほとんどいなかった。このため両者の関係を深く探究する人がでてこなかった。

「雅俗の対立」の枠組みをもちいて、中国の文化的な諸現象を見ていくことは有効でかつ重要である。しかし、一方では、「雅俗共賞」という、文字の文化と声の文化の落差を一举に乗り越えてしまうかのようなことばがある。知識層と庶民層の双方から歓迎されるジャンルあるいは作品を讀んでいることばで、出版書肆が通俗小説を出版するようなさいの宣伝文句に使う。ほとんど絶望的ともいえる雅俗のあいだの深い溝を無視できるかのような幻想を、このことばはふりまく。

昨年、天津で開かれた中国曲芸節（語りもの全国祭典）に参加した時にも、何かそうした鬱屈した感情をいだかされて帰ってきた。梅花太鼓という語りもの（日本でいえば、ひと昔前の人気歌手畠山みどりに太鼓を打たせながら浪曲風歌謡曲を唱わせているのを想像すればだいたいの雰囲気は推測できよう）の芸人が『紅桜夢』の一段を語りものに仕組んだ「黛玉葬花」を唱ったが、どうもあのうなり声と林黛玉のイメージとは結びつかなかった。その場の聴衆が堪能している醍醐味と原作の小説を読んで味わうそれとは自ずから違っているはずである。それでも中国の民衆にとっては、これも「雅俗共賞」のうちにはいるのであろう。

講釈師のことを「説書的」（「書」をかたるもの）といい、語りものの演目を「書目」というように、ほんらいの民衆の声の文化に属する伝統芸能においてさえ、文字の文化の影響は圧倒的で、その存在を前提にして、そこにすり寄っていく姿勢が顕著である。文字の文化を声の文化にパラフレイズしたもの、あるいはその逆が「雅俗共賞」ということかもしれない。しかし、それは「雅俗」が同じものを味わった、つまり「共に鑑賞した」ことにはならず、せいぜい同一の題材を共有しているだけにすぎないのではなからうか。